

耕作放棄地・遊休農地の在り方を考える

—兵庫県篠山市を事例として—

小前 静可

[指導教員：武庫川女子大学教授 黒田 智子]

キーワード：耕作放棄地，遊休農地，兵庫県篠山市，フィールドワーク

1. はじめに

今日、日本の農業に関する問題は、農業従事者の高齢化、後継ぎ不足、労働に見合わない収益など多岐にわたっている。

農業に関する数ある問題の中で、耕作放棄地・遊休農地に着目しながら多面的な調査を行う。また、それらと併せて、現在筆者が在住している兵庫県篠山市にあるいくつかの集落を事例として、身近な視点から耕作放棄地・遊休農地の現状を見つめ、その在り方を考えていく。

2. 篠山市における耕作放棄地・遊休農地の現状①

2-1 篠山市内の耕作放棄地の面積推移

兵庫県篠山市にはどれくらいの耕作放棄地があるのかを農林業センサス¹⁾の統計資料を調べ、面積の推移をグラフ化した(図1)。20年間で耕作放棄地は5倍弱に膨れ上がっており、今後この傾向は続くと考えられる。

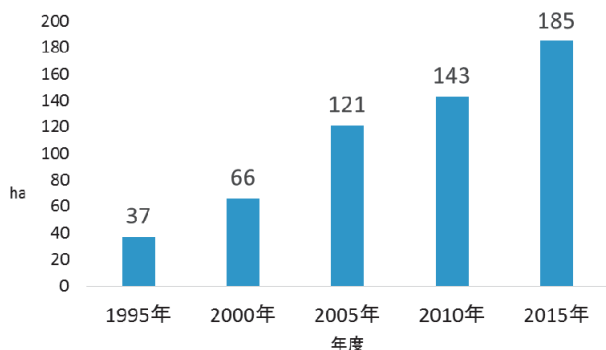


図1 篠山市耕作放棄地面積推移 農林業センサス(1995～2015)

2-2 篠山市役所農都環境課へのヒアリング調査

2-1に示した耕作放棄地の増加に対し、篠山市側はどのように考えているのかを知るため篠山市役所農都環境課へのヒアリング調査として電話取材を行ったところ、「農林業センサスの統計を含め、農業委員会²⁾の目視によるものでも、耕作放棄地・遊休農地の実態は正確に把握できていない。市の耕作放棄地・遊休農地がどこに分布しているかが一目でわかるマップを作りたいという意向はあるが、現状は大変厳しいものであると痛感している。」との回答だった。このことは本来正確な情報が提供できるはずの農家の事情がかかわることが推察される。

2-3 耕作放棄地・遊休農地についての農学研究者の見解

神戸大学大学院農学研究科中塚雅也准教授は農村地域社会の維持という点から、長年研究を重ねている。ヒアリングさせて頂いたところ、それらの維持・管理継続の難しさを痛感しているという。特に、「そもそも耕作放棄地・遊休農地を『悪』と考えるべきなのか、なんとしてでも解消すべきものなのかどうか」と問われたことが印象的だった。中塚准教授からの根本的な問いによって、耕作放棄地・遊休農地が生じることは必然であっても、それらを持て余して一番困っているのは農家であると再認識することができた。そこで、より農家の立場で耕作放棄地・遊休農地を捉えながら調査を進めることにした。

3. 企業と耕作放棄地・遊休農地の関連性について

3-1 和歌山県御坊市湯川町におけるフィールドワーク

企業と耕作放棄地・遊休農地には関わり合いがあるのか調査するため、近年、研究室と産学連携を行ってきた株式会社JFC(以下JFC)というカット野菜の生産、及びスーパーマーケット・飲食店への卸売りをしている企業の紹介で和歌山県御坊市湯川町へ行き、JFC契約農家であるT氏とN氏へのヒアリング調査と農地の見学を行った。T氏は地元農家から農地を借り、JFCに納品する野菜を作っている。T氏の契約農地に対する丁寧な仕事ぶりが土地所有者である地元農家の信頼を得ることで、所有者が管理しにくい中山間地域の耕作放棄地・遊休農地を利用してほしいと依頼され、実際に耕作を行っていた。このことが図らずも耕作放棄地・遊休農地の解消につながっていることが分かった。

3-2 神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ主催「農の学び場くるーらん」に参加

神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ主催「農の学び場くるーらん」による、株式会社マイファーム代表取締役西辻真一氏(以下西辻氏)の講演「中山間地の耕作放棄地を解消させる新たな挑戦—マイハニーの事例から—」の聴講、グループワークに参加した。西辻氏は株式会社マイファームの新事業として、耕作放棄地・遊休農地に蜂の巣箱を置き、同時に花を栽培しながら蜜源をつくり、蜂蜜を生産して関連商品を製品化する「マイハニー」と名付けた事業を行っている。西辻氏の提案する耕作放棄地・遊休農地ビジネスや、実際に成功している事業は目新しい内容が多かった。しかし、耕作放棄地や遊休農地を抱える農家がいきなりそれらの事業

に携わっていくのはとてもハードルの高いことなのではないだろうかと感じた。実際に、参加者のなかには土地を提供する農家側にとっては「奇抜な案で、実行しにくいという印象を受ける」と意見する農家もいた。

4. 篠山市における耕作放棄地・遊休農地の現状②

4-1 篠山市宇土地区・杉地区・東吹地区、谷山地区におけるフィールドワーク

各農作単位でみた時、農作業のどの部分に労力が必要なのか、どのような状況から耕作放棄地・遊休農地が生まれやすいのかを調査した。2017年4月～12月の9か月間にわたって、祖父母が営む農業の主要な行程に参加しながらその実態を観察した。農作業内容は米栽培と黒豆栽培に関するものである。米栽培に関しては、田植え作業と稲刈り作業、黒豆栽培に関しては作付け作業、間引き作業、支柱立て作業、黒枝豆(黄大豆)収穫作業、黒枝豆(黒大豆)乾燥作業、黒枝豆(黒大豆)収穫作業、脱穀作業を行った。併せて、農業を支える人数と構成、頻度、栽培している作物と種類を調査し、祖父母宅と篠山市宇土地区・杉地区・東吹地区、谷山地区にある田畑の位置関係、土地の規模、特徴などを観察した。加えて、農業への意識、耕作放棄地・遊休農地への意識などのヒアリングを行った。

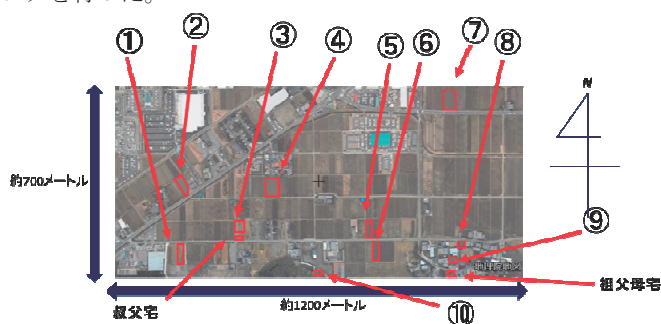


図2 祖父母宅との田畑の位置関係

図2は祖父母宅から周辺に広がる所有農地の位地を示した図である。田畑にそれぞれ通し番号を振り当て、各田畑の規模や特徴、作付けの種類などをまとめた。たとえば図3は、祖父母の所有する農地の中で唯一耕作放棄地になっている⑩についてまとめたものである。

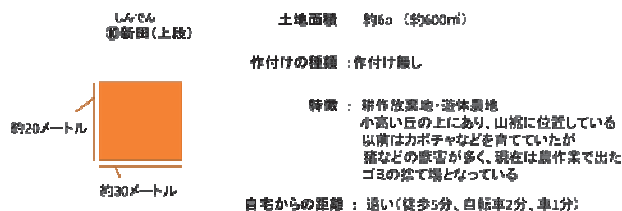


図3 耕作放棄地・遊休農地「⑩新田(しんでん)」

4-2 篠山市東浜谷地区・小枕地区におけるフィールドワーク

3-2のグループワークの参加者である農家のTK氏に協力を仰ぎ、篠山市東浜谷地区周辺にあるTK氏の農地を観察し

た。また、TK氏の実家である篠山市小枕(こまくら)地区で所有している耕作放棄地・遊休農地の分布と管理の実態、それらに対するTK氏の考えについてヒアリングを行った。

4-3 考察

4-1および4-2からわかったことを以下の5項目に分け、まとめた。

<農機>

稲刈り時に農機が壊れるが祖父と修理屋によって作業継続となる
↓
農機がきちんと機能するか、壊れてもすぐ修理できる環境にあるかが重要
↓
農家は同時期に作業を行うので同じようなトラブルが起こりやすく、修理屋がすぐ来ないことも多い

<農家の人手>

一つの田畑を高いウオリティーを保ちながら、見た目美しく管理するには細かな作業が必要
(例: 田の端に残っている米の刈り取り作業、畑に落ちている黒大豆の精拾い)
↓
少人数(2.3人)の農業は一人当たりの作業量が非常に多くなる(一極化する)
→以前は細かい作業を祖母が行っていたが、足を悪くし、作業ができなくなる
周囲の協力(協力を仰げる環境があるという前提)を得なければ、田畑の管理維持は困難となる

<農家の意識>

維持管理できないことに恥ずかしさを感じる(他の農家に対しても情けないと感じる)
今までどおり維持管理できなくなると途端に諦めてしまいがち

<農地のロケーション>

物理的に自宅から距離があると土地の管理は困難になる

<関連する政策(補助金)>

人手不足は農作業の継続を難航させる
→最低限の管理のために草刈り隊などの組織に管理を依頼するようになるが費用がかかる

図4 農家の視点から見た耕作放棄地・遊休農地の現状

5. むすび

耕作放棄地・遊休農地を国・市、企業、そして農家が問題視していることは確かだが、それぞれの捉え方に大きくギャップがあることが分かった。農家には自分の大切な人の命や先祖から受け継がれた思いを守るために作物を作り、土地を維持していきたいという明確で強い気持ちが根底にあるからではないだろうか。耕作放棄地に関する問題のデリケートな側面もまた、このことから発している場合が少なくないと考えている。

政府、企業は新しい政策や案を奇抜と捉えられないよう、農家の土地への思いに理解を示しながら、農家と対話を重ね、歩み寄っていく姿勢と行動が必要ではないかと考える。それらを経て初めて、今まででは考えられなかったような方法が受け入れられ、農地の在り方に新たな可能性が見出せるのではないだろうか。

注及び参考文献

- 1) 農林水産省、農林業センサスについて、
<http://www.maff.go.jp/j/tokei/census/afc/about/setumei.htm>
(2018/1/14)
- 2) コトバンク、デジタル大辞泉
<https://kotobank.jp/word>(2018/1/14)
- 3) 中塚雅也: 都市と農村のパートナーシップによる地域資源管理、35, 53-61, 2002
- 4) 合瀬宏毅編: 農地制度改革一担い手育成耕作放棄地減少は可能か、財団法人農林統計協会、2008
- 5) 高橋宏納・八田賢司編: 事例解説農地の相続、農業の承継、日本加除出版株式会社、2017